



木下恵介記念館 No.9 '13 冬号

栄町だより

Keisuke Kinoshita Memorial Museum

公益財団法人 浜松市文化振興財団
発行：木下恵介記念館
〒432-8025 浜松市中区栄町3番地の1
TEL&FAX 053-457-3450
E-mail: kinoshitakan@hcf.or.jp
http://www.hcf.or.jp
※ 無断複写・転載、放送、ネット流用を禁じます。



恵介とベンツとラッキーストライク

～天才と呼ばれたオトコの美意識～

齊藤 卓 木下恵介記念館館長

木下恵介記念館で開催した市民座談会「私の木下恵介～みんなで語ろう」に参加されたKさんからこんなお話しをお聞きした。

——四十年くらい前のある日、現在の木下恵介記念館の建物に近い道端に運転手付きの黒塗りのベンツが止まった。すると扉がひらき、木下恵介が降りてきた。監督はそこに居合わせたK青年に、「ちょっとおしえて、柳川亭はこのあたりじゃなかった？」とまるで友人と話すように声をかけてきた。K青年にはそれが大監督木下恵介であることはすぐに分かった。<柳川亭は戦前恵介の実家「尾張屋」と同じ江間殿小路に店を構えていた泥鰯ひらひらで有名な浜松の料理屋で、現在もおおくの泥鰯井のファンをもっている。> K青年は柳川亭が少し店を移転していたことを知っていたのでその事を木下恵介に伝えた。恵介は丁寧にお礼の言葉を言って、煙草を吸うかいと青年に尋ねたK青年が「はい」と返事をすると、車の中へ手をのばした恵介は一箱の煙草を差し出した。ラッキーストライクだった。勿論K青年はラッキーストライクにも、それを渡した木下恵介にも感動したことは言うまでもない。ラッキーストライクは当時でも珍しい両切りの煙草だった。つまりフィルターでニコチンを除去して「健康的」に吸いますという愛煙家には、そのパッケージデザインを除いて、毛嫌いされる煙草だった。——

このお話しをお聞きして僕はたまらなく嬉しくなっていて、会う人ごとに「木下恵介とベンツとラッキーストライク」の話をしているのだが、ついにこの『栄町だより』にも書くことにした。どうしてかといえば、こんな素敵でかつこい話を独り占めにしたいいけないと思うからだ。

有名人になると、推測や想像あるいは邪推からその人物像を語られてしまうことが多くなるようだ。怖いのはそうした風聞のようなものが何時の間にか「美しやかな真実」になってしまうことだ。木下恵介を語る時にも、そうした「美しやかな真実」がいくつかあるような気がする。不思議なことにこの「美しやかな真実」というものには、必ず尾鰭が着き、面白可笑しく捏造癖になってしまうことも世間にはよくある。

この「恵介とベンツとラッキーストライク」の話も、ある推測から木下恵介像を作っている人たちからみれば、「へえー、木下恵介はそんな人なの、随分お金持ちだったのね」と、嫌味の一つも言ってみたくなるのかもしれない。しかし世の中には道端に車を止め、窓ガラスだけを下ろし唐突に道を尋ね、まともな謝辞も言えず走り去る人がかなりいる。でも木下恵介は違う。いや違った。自分が誰であるかを知っている青年に声をかけ、その青年の生涯の「素晴らしい記憶」にこの一瞬の出来事を刻んでいったのだ。それもなにげなく。なにげなくだ。まるで木下恵介作品の物語の展開に出てくるようにだ。

このお話しを聞いて僕は木下恵介という人が、また一つ身近に感じられるようになった。ただ、その時、ベンツから降りてきた木下恵介がどんな服装だったのかをお聞きするのを忘れた。次回Kさんにお会いするときの楽しみにしておこう。

